

お お ね ん せ い
大きい 1年生と
ち い ね ん せ い
小さな 2年生



古田足日さく／中山正美え

913 ^{ふるた たるこ} 古田 足日

大きい1年生と小さな2年生

偕成社 1970

166 p. 24 cm

(創作どうわ傑作選 1)



^{おお}大きい^{ねんせい}1年生と ^{ちい}小さな^{ねんせい}2年生 (創作どうわ傑作選 1)

定価 500 円

発行 昭和45年6月10日

著者 古田 足日

画家 中山 正美

発行者 今村 広

発行所 株式会社 偕^か成^{せい}社^{しゃ}

東京都新宿区市ガ谷砂土原町3の5

振替 東京 1352番

本文印刷 中央精版印刷株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

◇著者の了解により検出廃止 ◇落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 8393—511010—0904

^{おお}大きい ^{ねんせい}1年生と
^{ちい}小さな ^{ねんせい}2年生



古田足日さく 中山正美え



PUBLISHED BY
KAISEI-SHA
ICHIGAYA
TOKYO

1927年，愛媛県に生まれる。早稲田大学露文科中退。
現在，評論・創作など児童文学の各分野で活躍中。主な

著者 ^{ふる た たる ひ} 古田 足 白

著書に「現代児童文学論」
「児童文学の思想」の評論
集や，「宿題ひきうけ株式

会社」「水の上のタケル」などの創作児童文学がある。
住所／東京都北多摩郡久留米町滝山団地6-1~23~403

1914年，宮崎県に生まれる。川端画学校で絵を学び，
1950年ごろから出版美術に従事するようになった。一
時光風会に所属したが，

現在はフリーで，主とし
て児童図書のさし絵をか

^{なか やま まさ み} 画家 中山 正 美

いている。児童出版美術家連盟・少年文芸作家クラブ
会員。住所／東京都目黒区目黒本町6丁目2~1



12
SA
MA

はじめに

『^{おお}大きい^{ねんせい}一年生と^{ちい}小さな^{ねんせい}二年生』という
だいをみて、きみたちは、どんなことを
おもいましたか？

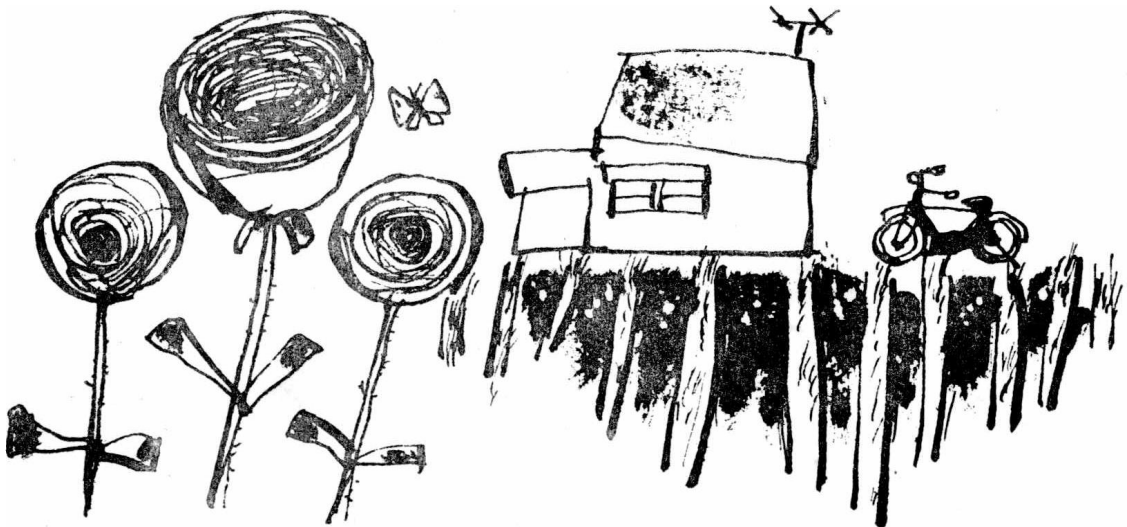
おや、だれかがいっているこえがきこ
えてくるようです。

「^{ねんせい}一年生は^{ちい}小さくて、^{ねんせい}二年生は^{おお}大きい
に、この本^{ほん}の^{ちい}だいは、まちがってるんじ
やないかな。」

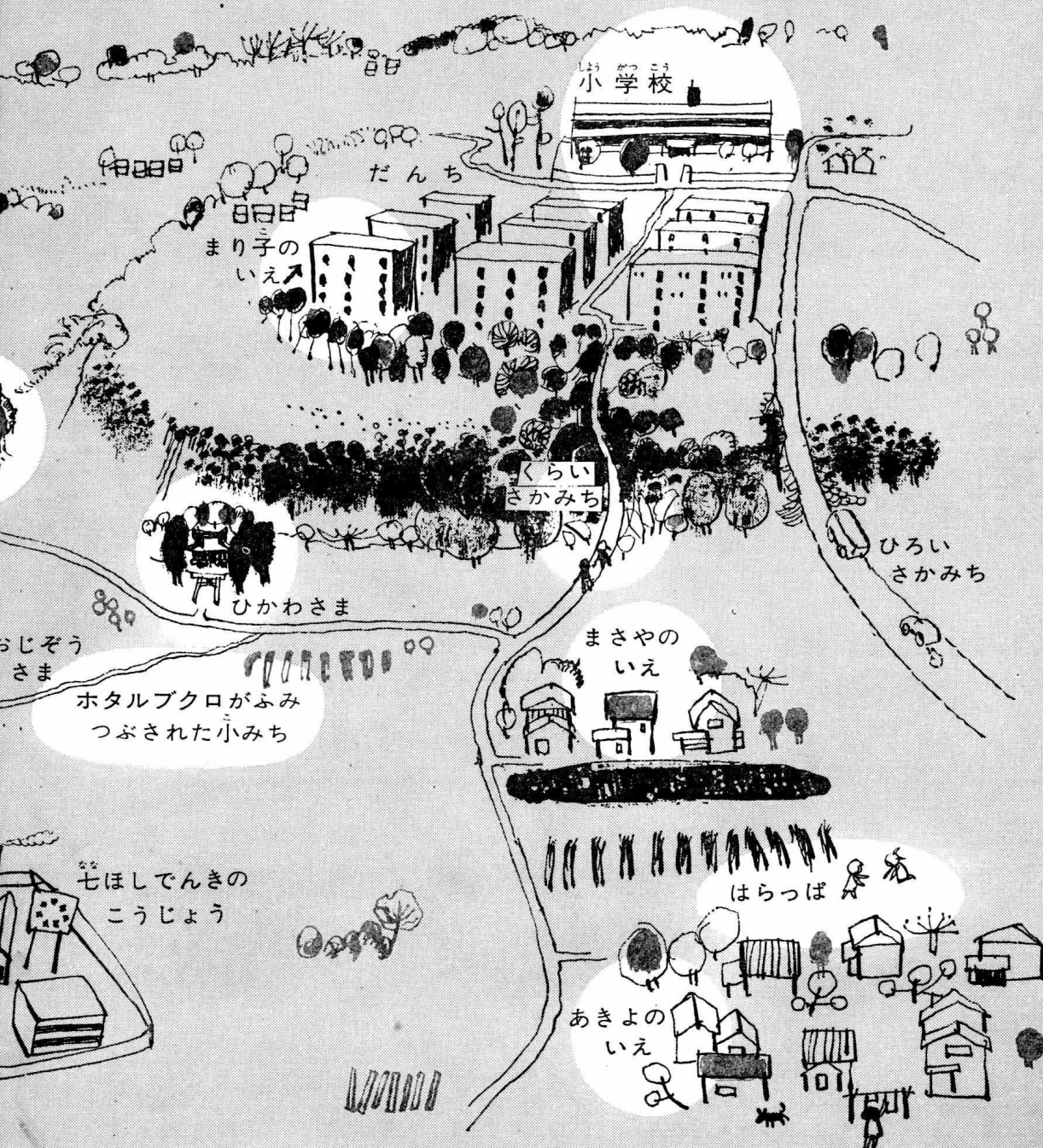
そうかな？ どうかな？

まあ、この本^{ほん}をよんでみてください。

^{ふる}古^た田^{たる}足^ひ日



まさやの いえの まわり と、一本スギの森^{いっ ほん}まで^{もり}



ホタルブクロの
のはら

一本スギの森

ケヤきなみ木

じてんしゃの おじ
さんにあったところ

パンを かった
じゅうたくがい

わき水

おてら

みちを たずねた
のうか

おるすの かみさま

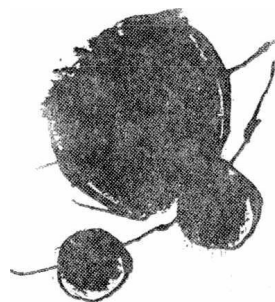
ホタルブクロを
とったところ

てんじんさま

ウシごや

おイナリさん

もくじ



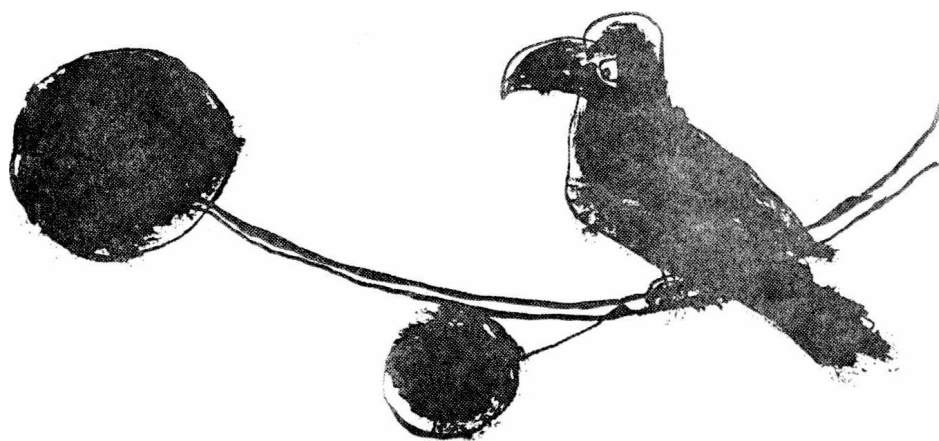
1 一年生ねんせいのくせに 大きおおすぎる……11

2 大きおおい子こが、小ちいさい子こに 手てをひかれる……23

3 ぼく、おなかすいたあ……33

4 「しっかりする」とは、どういうこと?……44

5 あきよは、またけんかする……55



6 子どもには、たいていのみちは、はじめてのみち……66

7 あきよがないたのを、はじめてみた……78

8 まさは、いえです……93

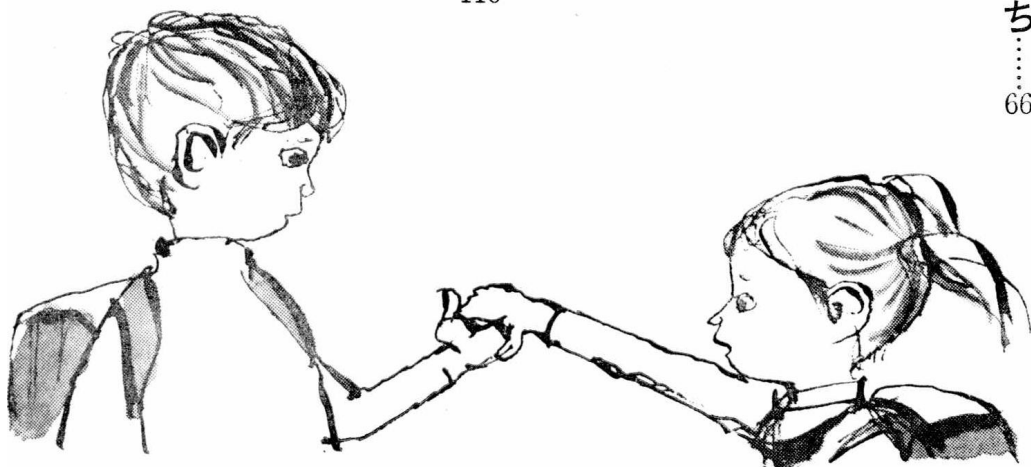
9 ぼうやは、しっかりしてる……105

10 しんせつなおじさんか？ ゆうかいはんか？……116

11 まさは、とうとう一本スギの森につく……128

12 のんびりや、まり子がかつやくする……140

13 ホタルブクロののほらに、にじがでる……154





1 一年生のくせに 大きすぎる

四月^{がつ}。あたらしい学年^{がくねん}がはじまった日の、ごこのことです。

とうきょうのはずれの、あるまちのはらっぱで、ふたりの女^{おんな}の子^こがあそんでいました。みずむらあきよと、ふじおかまり子^こです。

ふたりとも二年生^{ねんせい}です。でも、せがひくいので、ようちえんの子^こぐらいにしかみえません。もちろん二年生^{ねんせい}では、いちばんチビです。

そして、ふたりのうちでは、まり子^このほうが、あきよより、ほんのちょっと、ゆびのはばのはんぶんぐらいだけ、せがたかいのです。つまり、あきよが、二年生^{ねんせい}ではいちばん小さいのでした。

あきよは、そらいろの大イヌフグリの花^{はな}を、ままごとのちゃわんの中^{なか}におとしながらいいました。

「わたし、がっかりしちゃった。二年生^{ねんせい}になると、せがたかくなるとおもったのに、すこしもたかくならないもん。」

「そのうちに、たかくなるわ。」

と、まり子^こはのんびりとこたえて、ホトケノザの、こいももいろの花^{はな}を、じぶんのままごとちゃわんの中^{なか}にいれていきました。

あきよは、まり子^こにはなそうとおもったことを、やめにしました。あきよは、おなじチビのまり子^こにもがっかりしてもらいたかったのに、まり子^こが、すこしもがっかりしないからです。

ふたりはあるきだして、ままごとの花^{はな}を、もっとあつめにかかりました。

あきよがまり子^こにはなしたかったのは、きのうのばんと、けさと、二ど、あきよが、せのたかさはかったことでした。

どうして、そうしたかというと、いままであきよが一年生^{ねんせい}だったとき、ちうれいでならんでいる二年生^{ねんせい}をみると、二年生^{ねんせい}のいちばん小さい人^{ひと}でも、あきよよりずっと大きいのです。だから、あきよは、あきよも二年生^{ねんせい}になると、そのくらいになるはずだ、とおもいこんでいました。

——二年生^{ねんせい}になるまえのばん、わたしがねてるあいだに、せは、ぐ、ぐう

っとのびるんだわ。

あきよは、そうかんがえたのです。

そして、けさ、むねをどきどきさせながら、せのたかさはかってみると、
さんねん、はしらのしるしは、きのうのばんと、おなじところでした。

がっかりしたあきよをみて、おかあさんは、わらいながらいいました。

「あきよ。せというものは

ね、きゅうにのびたりなん

かしないのよ。まいにち、

まいにち、目^めにみえないぐ

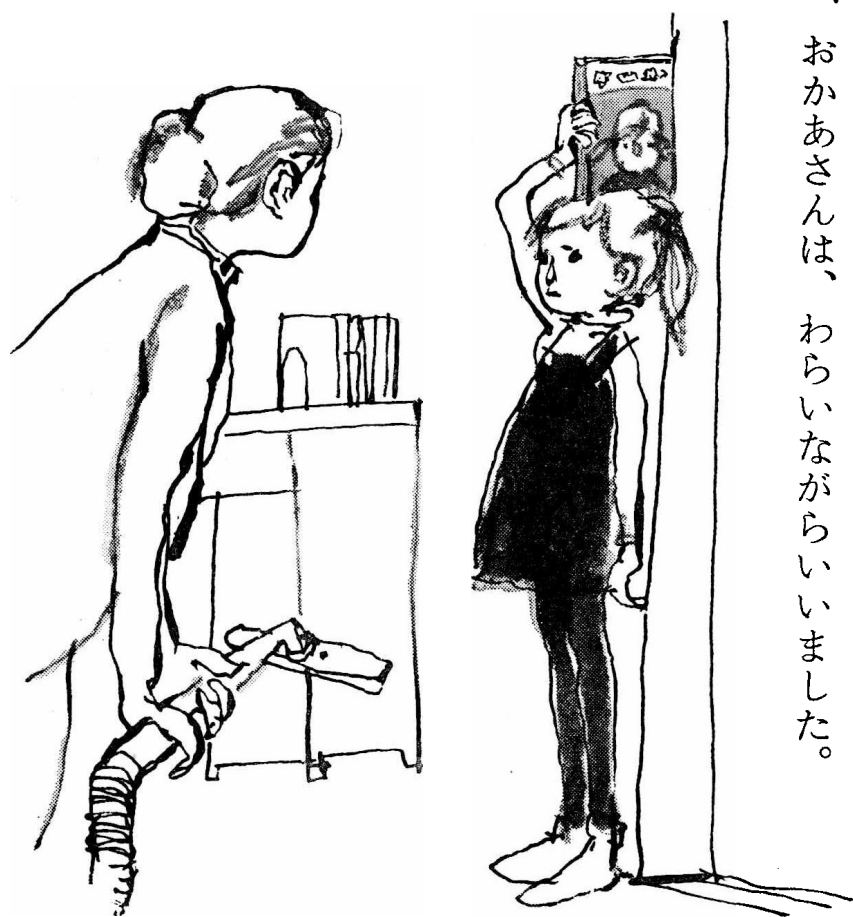
らいずつ、のびていって、

たかくなるものよ。」

「だって——」

と、あきよはふくれました。

あきよは、じぶんのせのひ
くいのが、いやでした。もち



ろん、かきねをくぐったり、イヌごやにはいこんだりするのには、小さいほうが、べんりです。でも、いつだって、ならぶのはいちばんまえ、きょうしつでもいちばんまえ、というのは、おもしろくありません。あきよはせめてまえから三ばんめぐらいになりたいのです。

それに、いちばんいやなのは、男の子とけんかするときでした。けんかするとき、男の子はかならず、「なんだ、このチビすけ」とか、「チビ女のくせに、なっまいきな」などと、いうのです。

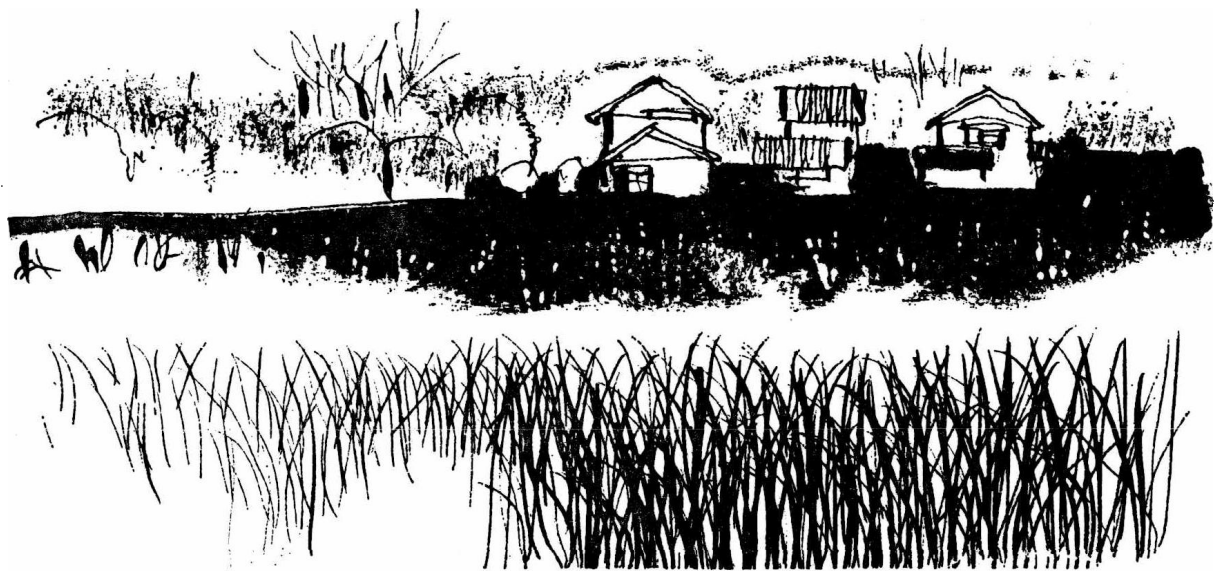
だから、あきよは、せがたかくなりたくって、いっしょうけんめい、せをはかったのに、おかあさんはわらったのです。

あきよが、まり子にはなそうとしたのは、こういうことでした。

「やだな、やだな。かあさんは、やだな。小さいのは、やだな。」

あきよは、いつのまにか、『やだな』のうたをうたいながら、花をつんでいました。

ところで、あきよたちが花をつんでいるはらっぱのむこうはムギばたで、



ムギばたけのむこうはシバばたけで、シバばたけのむこうはネギばたけで、そのむこうには、いえが三げんならんでいました。

そのまん中のいえの子は、あきよたちのしらない男の子で、おがわまさやといました。

あきよたちが花をつんでいるころ、まさやは、がけのあいだのさかみちを、おかあさんの手にぶらさがるようにして、うちのほうへかえっていくところでした。

まさやは、一年生になりたてのほやほやで、入学しきのかえりでした。まさやや、あきよの学校は、ごぜんちゅうがしぎ、ようしきで、ごこが入学しきと、なん年もまえから、きまっていたました。

まさやは、せもたかく、からだも大きい子で